

2015年12月20日 MJCC 礼拝メッセージ 要約 柏倉秀吉

聖書：イザヤ9：6－7

タイトル：「私達のためのクリスマス」

---

イザヤ9：6－7。

クリスマスおめでとうございます。

この箇所は、クリスマスの時に、教会でよく読まれる救い主の誕生について記されている箇所である。

イザヤという人物は、旧約聖書の代表的な預言者の一人で、彼は、聖書の一番初めの創世記から預言されている「救い主」の誕生について、再び、「救い主」の誕生を預言したのである。

イザヤが「救い主」の誕生を預言した当時は、国中が荒れ果て、苦悩と絶望、そして悲しみが満ちているそういう暗黒の時代であった。

イスラエルは、同じ民族でありながら北イスラエル王国と南ユダ王国の南北二つの王国に分断されていた。

この時、南北両王国は、時の大帝国であったアッシリヤ帝国の圧力を受けていた。アッシリヤは当時、非常に大きな力を持っていた。

そこで北イスラエル王国は、隣国のアラムと同盟を結んで連合軍を作り、アッシリヤの攻撃に備えたのである。

そして南ユダ王国にも同盟に加わるようにと話しを持ちかけたのだが、それは穏やかな話ではなく、従わなければ攻め入る！という、いわば脅迫した内容であった。北イスラエル王国とアラムの連合軍は、南ユダ王国に対し陣を敷き、実際に攻撃しに来ていたことが、イザヤ7章に書いてある。

そこで、南ユダ王国の時の王であったアハズ王は、北イスラエルとアラムの連合軍から私達を助けてください。と、自分たちにとっても脅威であり、敵国であったあのアッシリヤ帝国にお願いするという事を選んだのである。

アッシリヤは、北イスラエルとアラムを打ち負かして王国を陥落し、北イスラエルの民たちを捕囚してアッシリヤに連れて行ったのである。

彼らにとっては、多くの者が殺され、国を失い、家族を失い、そして帰るところがなくなってしまったのである。自由を奪われ、奴隷のような生活がアッシリヤでは待っていたのである。その嘆き悲しみ、絶望観は、相当であっただろう。北イスラエル王国またアラム、そして南ユダ王国にとって、この時代は、まさに生きるか死ぬかの非常に緊迫した状況がいつもそこにあったのである。

北イスラエル王国が陥落した後、必然的に南ユダ王国が標的とされたのだが、彼らは自分で自分の首を絞めたことになる。(実際には、アッシリヤの次の超大国となったバビロンによって南ユダ王国は陥落することになった。)

南ユダ王国の民たちは、どうしたら自分たちが生き残っていけるだろうか。またどうしたら救われるだろうか。と、あらゆる手段を使って、救いの道を模索したのである。

イザヤ8：19－22がそれである。

「人々があなたがたに、「霊媒や、さえずり、ささやく口寄せに尋ねよ」と言うとき、民は自分の神に尋ねなければならない。生きている者のために、死人に伺いを立てなければならないのか。おしえとあかしに尋ねなければならない。もし、このことばに従って語らなければ、その人には夜明けがない。彼は、迫害され、飢えて、国を歩き回り、飢えて、怒りに身をゆだねる。上を仰いでは自分の王と神をのろう。地を見ると、見よ、苦難とやみ、苦悩の暗やみ、暗黒、追放された者。」

南ユダ王国の民は、すぐにでも解決の言葉が欲しくなり、「霊媒やさえずり、口寄せ」という、いわゆる「占い」にうかがいをたてている現実がそこにあった。

しかしイザヤは、20 v 「おしえとあかしに尋ねなければならない。もし、このことばに従って語らなければ、その人には夜明けがない。」と語っている。それは、いかなる人間的な手腕に頼るのではなく、誠の神に助けを祈り求め、また尋ねなければ「夜明けが無い」、すなわち「救いが無い」ということを彼は、語っていたのである。

これらのことは、当時の人々に対してだけではなく、私達人間が誠の神を信じないで、無視をして、自分たちであれやこれやと必死にもがきながら生きていくなら、そこには夜明けが無く、闇があり、そして絶望と死があるということである。

聖書は、神を無視して闇の中を歩んでいる人間のことを「罪人」と呼んでいる。そして、この「罪人」の最後に待っているのは、闇、絶望、死なのである。

黙示録 3 : 17 にはこのように記されている。

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」

人間が誠の神を無視して生きていく時に、そこには決して夜明けがありません。救いは無いのである。

しかし、そこに唯一の夜明けと救いが与えられた。

それがこのクリスマスであり、救い主イエスの誕生である。

イザヤはそのことを 6-7 v でこのように預言した。

6-7 「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」

6 v に「ひとりのみどりご・・・」とある。

それは、空想でも作り物でもなく、現実のリアルに生きた人間として、救い主が地上に来られるということである。

ヨハネはそのことを、それは単なる人ではなく、神が人となってこられた。と記している。(ヨハネ 1 : 14)

これらのことは、人間の目に見える形で来る。ということだが、イザヤの時代に生きていた民にとっては、今すぐにでもその救い主を見たい。という思いもあったであろう。

しかし、実際にこの救い主が与えられたのは、彼が預言してから 700 年も後であった。

では、その間、当時の民たちには「救い」が全く無かったのか。と言うと、そうではない。

それは先に述べたように(イザ 8:20)、神を信頼し、神に尋ね求めて生きるなら、救いに導かれるのである。

そしてイザヤという預言者を通して、「救い」について、神のことばを具体的に聞くことが出来たのである。だが、彼らはそのことをしなかったのである。

今の時代は、イザヤ達のような預言者に代わり、この教会が、そして私達クリスチャン一人一人が、この救い主イエスが来られた事実を人々に知らせているのである。

さて、イザヤは、この救い主とは、赤ん坊でありながら、6 v 「・・・「不思議な助言者、力ある神、永遠

の父、平和の君」・・・」であると語っている。

「不思議な助言者」とは、並はずれた、驚くべき、人間の考えをはるかに越えたみわざをなす助言者(あるいは指導者)ということの意味している。

確かに、神を信頼し、神のことばに従っていく時に、人の目には、一見、不思議に思えることがある。

I コリ 2:9 にはこのように記されてある。

「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

そもそも救いとは、人間にできることではなく、まさに神にしかできない不思議と言えよう。

そしてこの神は、私達のいかなる場合や、またどんな状況からでも救いの御業を成し遂げることが出来る「力ある神」であり、そしてこの救いは、一時的というのではなく、「永遠」であり、また完全に完璧な「平和」が約束されているということである。

イザヤはこの救いの到来のことを後の 61 章でも預言しているのだが、イエスご自身が、そのことを「実現した。」と語っている。

ルカ 4 : 17 - 21 「すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」

イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみな目がイエスに注がれた。イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり 実現しました。」

このように、イエスこそが、イザヤも預言した救い主その者なのである。しかし、人間はこの救い主であるイエスでさえも、十字架で殺してしまった罪深い者なのである。

もはや、救い主さえも殺した私達人間に用意されているのは、暗闇と絶望、そして死でしかなかったのである。

神はこの罪深い人間に対して、御怒りを燃やし罰を与え、人はその罪のゆえに死ぬ者となってしまったのである。

だが、イエスのこの死とは、そのこと自体も神のご計画であったと、イザヤは預言しているのである。(イザヤ 53 : 1 - 10)

イエスの死は、人間の罪に対してあらわされている神の御怒りと罰へのなだめのために、捧げられた罪無く死ぬ必要がないご自身の命の犠牲なのである。

この罪のないイエスの命の犠牲によって、神は、このイエスによる救いの御業を信じる者を救うと約束したのである。

それが、イエスの死(十字架)の本当の意味であり、また、全ての人を救うために成されたイエスによる救いの御業なのである。

その救い主イエスが、このクリスマス、お生まれになったということを心から感謝したい。

そしてこの方を信じる時に、私達は暗闇、絶望、死ではなく、光と希望と命に導かれるのである。